

# Newsletter for JADR

## I . IADR 役員 の 任期 を 終えて

IADR 元会長 作田 守

はじめに

1996年3月のSan Franciscoでの学術大会後にIADRのVice Presidentに就任して以来,1997年3月のOrlandoの学術大会後にPresident-elect,1998年6月のNiceの学術大会後にはPresidentに就任,1999年3月のVancouverでの学術大会をPresidentとして開催し,その後2000年4月のWashington, D.C.での学術大会までImmediate Past Presidentとしての役割を果たし,IADRの役員としての任務を無事終えることが出来ました。このことをまずJADR会員の皆様にご報告いたします。これらの役員としての責務を果たすことは大変名誉なことですが,かなりの実務を伴います。日本人として最初にこの立場に立ったということで,JADRの歴代会長を始め,理事・評議員の皆様方,さらに,会員の皆様方から様々なご協力を頂きました。心より厚く御礼を申し述べます。この度,その間に経験した事をこのニュースレターに書くよう要請されましたので,役員の主な責務および学会運営の考え方や方法などについて述べたいと思います。

IADRは,会則に記された目的を達成するべく,毎年,国際学会を開催し,Journal of Dental Research (JDR)などの学術雑誌を発行する非営利の学術団体です。日本の学会運営とはかなり異なるところがありますが,何かの参考にして頂ければ幸いです。

### 1. 役員 の 責務 (duties and responsibilities) について

#### 1) 会長 の 責務

- (1) 理事会 (Board of Directors meeting), 評議会 (Council meeting), 財務委員会 (Finance Committee meeting), 学術大会プログラム委員会 (Annual Session Committee meeting) などの重要な会議に出席し, 役割を果たす。
- (2) 理事会, 役員会 (Officers meeting), 評議会などで議長を務める。
- (3) 学術大会 (General Session) の開会式で議長を務める。
- (4) 会長のメダルを次期会長に伝達する President's Reception を主宰する。
- (5) 学術大会時に開催される各国部会長 (Division Presidents) との朝食会で, 議長を務める。
- (6) 学術大会中はもとより, 会長の期間中は, 外部の関係諸団体に対して, IADRを代表して行動する。
- (7) IADR newsletterの各号に会長からのメッセージを書く。

(8) 評議会に対して会長としての報告書を書く。

(9) 出版委員会 (Publication Committee meeting) で IADR の代表としての役割を果たす。

(10) 会長の期間中に少なくとも各国部会の1つを訪問する。

#### 2) 次期会長の責務

- (1) 財務委員会, 理事会, 評議会に出席する。
- (2) American Association for Dental Research (AADR)の次期会長と共に学術大会プログラム委員会に出席し, 委員長を務める。
- (3) 学術大会開催中に開かれる, 各研究グループのプログラム責任者 (Group Program Chairmen) との朝食会に, AADRの次期会長と共に出席し, 議長として当該学会についての意見を聞き, 次年度の学会に反映させる。
- (4) 学術大会の開会式でPresident-elect's addressを行う。これは, 会長就任演説に相当する。
- (5) 理事会の承認を得るべく, 常置委員会の委員を選任する。
- (6) 学術大会開催中に行われる W.J. Gies Distinguished Lecture の演者を選出する。

#### 3) 副会長の責務

- (1) 学術大会プログラム委員会, 財務委員会, 理事会, 評議会に出席する。
- (2) Newsletterの編集長を務める。このNewsletterは, 学会本部で準備し, 校正し, 配布される。

#### 4) 直前会長の責務

- (1) 理事会, 評議会, 役員会に出席する。
- (2) 副会長指名委員会のメンバーとなる。

以上, 役員として求められている主な責務を記しましたが, ご覧のように日本の学会と異なる所があります。

学会の最終の意思決定機関である評議会の構成メンバーや議決権においても異なる所があります。例えば, institutional memberのカテゴリーでIADRの会員になっている多くの企業のうち代表者1名は議決権のある評議員ですが, JDRの編集長, 3名の無任所理事, 事務局長は, 評議会で議決権を持たないと会則で決められています。また, 議事進行についても, 評議会の意思決定の方法は, Robert's Rules of Orderに則って行われます。日本から評議会に初めて出席する評議員の方々には会議の進め方に面くらうことが多いようです。この意思決定の方法は, その他の会議でも通常用いられています。

### 2. 学会運営について

#### 1) 基本方針

基本的な運営方針として, 私が受け止めたのは, 様々な medical science 分野の国際的な学会と肩を並べて活動をするこ

と、独創的な最先端の研究発表の場として相応しい学会運営を計ること、さらに、若い研究者の育成を計ると共に、未だ歯科医学研究が十分行われていない国や地域に研究を定着させ、発展させることなどです。

そのために、具体的に行っていることは、1995年のSingaporeの評議会にて概要が承認された学会の戦略計画( strategic plan )を、1996年のSan Franciscoの評議会にて決定し実施していること、財政基盤を確立していくこと 経験ある優れた本部事務局員を確保すること、出来るだけ多くの研究者が世界各地から参加しやすいように学会の年会費、学術大会の登録費を可能な限り低く抑さえ、JDRなどの雑誌は全会員に購読して欲しいが、北米以外の地域では購読を義務付けてはいないなどを挙げることができます。

## 2) 本部

本部( central office )はAlexandria, VAにあります。事務局長( Executive Director )が事務局の最高責任者で、事務局次長( Deputy Executive Director )が補佐しています。この2人は共に歯科医の資格と学位を保持し、教授や学会長の経験者ですが、専任の事務局長、事務局次長として仕事にあっています。他は事務職員ですが、このような事務局員( 現在15名 )の構成も日本と異なる点でしょう。

## 3) 学術大会について

学術大会を開催する場合、本部に専任の大会開催担当部門を擁していますので、本部が主なことをすべて取り仕切ります。日本という大会長または会頭という立場は無く、Local Organizing Committee( LOC )のChairとしての役割をお願いするわけで、Presidentが本部と開催地にそれぞれ居るといった体制はとりません。LOCの皆さんのご協力は大変重要ですが、LOCの方々の大会開催の準備に費す時間と雑用を出来るだけ省いてもらい、普段寸刻を惜しんで行っておられる本務の研究や教育に支障を来さないようにして欲しいとの考えによるものだと思います。

学術大会のプログラムは、会長、次期会長( 委員長を担当 )、副会長、事務局長からなるAnnual Session Committee(ASC)のメンバーで最終的に決められますが、20の各研究グループの代表者により作られると言っても過言ではありません。送られてきた抄録は、まず各研究グループに送られ、採否が決定されてきます。シンポジウムの提案も、各研究グループから行われるのが普通です。Divisionからシンポジウムを提案することも出来ますが、あまり多くはありません。それらを受けて、ASCで検討がなされるわけです。

## 4) 予算について

学会の予算に関して日本と大変違うのは、学術大会登録費も年会費もすべて同じ懐に入る、つまり、本部に入るという点です。さらに、学術大会開催に際しては出来るだけ経費を節約し、余剰金を残すようにすることも異なる点です。余剰金の10%は途上国の研究助成( 前述のstrategic plan に則った助成 )に当てられ、残りの20%は開催したDivisionに配分されます。Divisionへの分配金は、各Divisionにとって貴重な財源のようで、主に若い研究者の研究を育成・奨励するため、研究発表をする会場への交通費の補助とか、優秀な研究者に対する賞金など、大変

有意義に使用されています。このように配分された残りを貯えて財政基盤を作るわけです。貯えられた資金は、IADRの資産( assets )と呼ばれていますが、1998年の場合、そのportfolioの内訳は72%が株式への投資、22%が公社債への投資、あと6%程度が現金でした。財務委員会の下部委員会として作られた投資委員会( investment committee )が財務理事、投資の専門家( investment manager )、事務局長らによって構成され、損が出ないように、常に世界の経済に注目しています。この投資について財務理事は、1999年のVancouverの評議会にてInvestment Policy, Objectives, Guidelines and Proceduresを提案し、可決されましたので、今後はこの方針に沿って投資が行われることになりました。IADRは非営利団体として、Virginia州の法律で運営されていますから、会計監査は公認会計士3人が3日もかけて行っています。1998年の場合、年間の全収入は310万ドルですが、投資によって得た配当金や分配金などで学会の年間収入の39%をカバーしました。毎年同じようにしていますが、このようなことで年会費が低く抑えられているわけです。会員が払う年会費は全収入の14%程度しかなく、学術大会の登録費は42%を占め、あとは頂いた寄付など5%ほどでした。会員各位に届いているIADR newsletter, Vol. 21, No.4, 2000をご参照下さい。

国立大学の教員をしていた私にとって、学会の余剰金を株や債券に投資することは極めて危険な事のように思いましたが、アメリカの大学では、特に管理職にある教授は、この方面の知識が要求されるようです。アメリカの経済が好調で、株価も高値が続き高いリターンを得られるものがあるのに、このような経済的背景とは無関係に学会や大学を運営することは、考えられないようです。

## 5) 学術雑誌について

IADRのofficial publicationであるJournal of Dental Research( JDR )は、その他の、Critical Review in Oral Biology and Medicine, Advances in Dental Research, Special Care in Dentistryと同様、それぞれ学会の会計とは別の予算で発行されています。つまり、学会本部は4種類の雑誌の出版社としての機能も持ち合わせています。ですから、この場を借りて少しでも多くの会員にこれらの雑誌の購入をお願いしたいと思います。同時に、会員のみならず広くbiomedical science分野の研究者も関心を寄せる良い論文の投稿が望まれるわけです。これらの出版物に関しては、財務委員会、理事会でその収支決算が審議されますが、運営に関する事項は、学術大会時に開催される出版委員会にてなされます。論文の採否に関しては、編集長はもとよりeditorial boardのメンバーによってなされていることは、周知のことと思います。

IADRでは、会員にとってこれらの雑誌が読み易いかどうか、どのようなことを会員がこれらの雑誌に要望しているか、などについて1998年にAADRと共に、専門家に調査( publication audit )を依頼しました。その報告を1999年5月に受け、投稿者には、論文ができるだけ早く印刷されるように、また、出来るだけ多くの論文が掲載できるように配慮がなされ、さらに購読者には、雑誌をより読みやすい体裁にするなどの改変がなされ、2000年1月号から実施されています。

## 6) 途上国での歯科医学研究の推進について

途上国で歯科医学研究を定着させ、発展させようという IADR の使命の 1 つについては、Task Force on Developing Region という特別委員会が設けられ私が委員長として検討することになりました。世界の状況を知るため、同委員会の各委員から情報を提供してもらい、分析の結果、それぞれの地域の要望に応じた研究の推進の仕方を尊重して実施することが重要であるとの結論に達しました。1999 年の Vancouver での学術大会時の評議会で、3 年間の試みとして IADR の資産の中から年間 4 万ドルを、前述の学術大会の余剰金の 10% に加えて支出し、世界各地での研究を推進することが決められ、新しく、Regional Development Program Committee (RDPC) が常置委員会として 9 名の委員で発足しました。毎年、11 月 1 日までに、先進国の研究者が Request for Proposal (RFP) を本部に提出することにより、近隣の途上国或いは地域の研究体制の構築、研究の推進が行われるわけです。なお、RFP の内容が IADR の主旨に沿ったものであるか否かの判断が RDPC の委員会と理事会で下され、要求した予算についても査定が行われます。予算を貰い、研究を推進した成果については、本部に報告する義務があります。

1999 年には、Australia and New Zealand Division からの要望で、オセアニア地域の研究者、特に School of Dental Health in Fiji School of Medicine の研究者のトレーニングに対し、また、Venezuelan Division からの要望で、Columbia, Ecuador および Bolivia の各国で IADR の section を作り、これらの国の大学で共同研究を推進することに対して予算が配分されました。2000 年には、Brazilian Division からの要望で、Latin America および Caribbean 地域の臨床研究推進に対して、Continental European および Scandinavian Divisions からの要望で、central eastern/eastern Europe の地域における歯科医学研究の推進に対して、Irish Division からの要望で、中東地域での歯科医学研究の推進に対して、South African Division からの要望で、南アフリカ地域での歯科医学研究の推進に対して、Southeast Asian Division からの要望で、oral health science 研究者のトレーニングに対して予算が配分されました。日本部会からも、今後この方面の活躍が望まれます。

## 7) Memorandum of Understanding (MOU) について

IADR とその部会の 1 つである American Association for Dental Research (AADR) との間に取り交わされている MOU も本学会の運営に関する重要な部分ですので、触れておきたいと思います。

IADR は上記のように様々な動産、不動産、人的資源を持っています。つまり、学会本部の経費、雑誌発行の収支や株などの有価証券の損益、北米以外での学術大会開催の頻度、余剰金・分配金の配分、事務局長の選任に対する責任のあり方などについて 1991 年 4 月に、時の IADR 会長と AADR 会長との間で MOU が取り交わされました。その後、若干の変更がなされましたが、2000 年 4 月に開催された Washington, D.C. での学術大会時の評議会で、大きく見直された MOU が提案され、承認されましたので、Sally Marshall IADR 会長と Stephen Bayne AADR 会長との間で新たな申し合わせが取り交わされました。

この申し合わせにより、IADR と AADR は上記のそれぞれを

定められた割合（ほぼ半々の割合ですが）で共有します。もう少し具体的に幾つかのことについて述べますと、この申し合わせで 2002 年からは、学術大会開催時に赤字が出たとしても、大会に参加した会員の Division には、いくらかの分配金が出るように、従来の登録費に 10% を上乗せした登録費を徴収し、参加者数の比例配分で Division に還元することになりました。また、2005 年に IADR と AADR が北米地区で学術大会を開催した後は、隔年ごとに北米以外の地区で学術大会を開催することになりました。北米地区以外の Division からの学術大会開催の要望が大変多いので、現在の 3 年に 1 度は北米以外の国で行うという取り決めを変えたわけです。Host Division に対する学術大会の余剰金の配分は従来と同じ 20% とされています。Host Division とは、"Division or group of Divisions, which the Council has approved as the host(s) of the General Session" と定められています。新たな事務局長を選任しなければならなくなった時は、IADR, AADR が共に同じレベルの責任を持って選任する、などの申し合わせが取り決められています。

## 8) 2001 年に日本で行われる IADR General Session について

2001 年 6 月 27 ~ 30 日には、千葉の幕張で IADR General Session が開かれます。既に述べましたように、この学会は日本で行われる多くの学会とは、運営の考え方や方法が大きく異なります。本部の試算によれば、学会場など日本での経費が北米のそれより極めて高額なため、大きな赤字が予想されています。よって、せめて収支をとんとんの所に持って来ることが出来ないかと、財務理事、事務局長などが LOC Chair である黒田敬之理事と共に様々な努力を重ねておられるところです。赤字が出るということは、この学会を co-host してくれる Australia and New Zealand, Chinese, Korean, Southeast Asian Divisions に対する学術大会の余剰金の配分を不可能にするばかりでなく IADR の財務委員会・理事会・評議会に対しても、日本部会は具合の悪い状況を残すことになりはしないかと危惧しています。日本部会は IADR の中で AADR に次ぐ会員数を擁し、高いレベルを誇っている部会です。学会には是非演題を提出し、積極的に多数の会員が参加されることを期待しております。IADR のホームページ <http://www.iadr.com/> の meeting をクリックして下されば、様々な情報を得ることが出来るので付記しておきます。

おわりに

IADR の役員として経験したことはまだまだ沢山ありますが、取りあえず日本の学会とは大きく異なる点を思い付くままに記しました。最後に私に課せられた任務の遂行に当たりご協力頂いた IADR・AADR の役員・理事および本部の事務局長を始めとする職員の皆様に深謝すると同時に、成功裡に終えることが出来ました Vancouver での学術大会の開催に当たりご協力戴いた UBC 歯学部長の Yen 教授を Chair とする LOC の皆様に心より御礼申し上げます。さらに、会長として訪問した、Argentine, Egyptian, Korean, Japanese, Southeast Asian Divisions の皆様のご好意に厚く御礼申し上げます。

2000 年 6 月 21 日記

## II . KADR 学術大会報告

大隅 典子

(東北大学大学院医学系研究科器官構築学分野)

JADR 会長岡田宏先生, 前 JADR 会長黒田敬之先生を初めとする JADR 理事会の先生方からのご推薦により, 本年1月21日, 22日にソウル市北部にある Kyung Hee 大学で開催されました The 18th Annual Academic Session & The 16th General Meeting of Korean Division of the International Association for Dental Research (KADR)に参加させていただく機会を得ることができました。今回の学会のテーマが Craniofacial Growth and Developmental Biology ということであったため, 現在の所属は医学部なのですがご推薦の荣誉を賜りました。1時間の Special Lecture を行うというのは若輩の身に余る大役とは存じましたが, 東京医科歯科大学江藤研在籍時より行って参りました頭部神経堤細胞に関する研究について, “Cranial Neural Crest Cells and Facial Morphogenesis” と題してお話させていただきました。

学会前日に仙台からのアジア航空直行便でソウルに入り, Scientific Program 委員である Kyung Hee 大学校・歯科大学・口腔解剖学講座の Shin Je-Won 教授自らが空港に出迎えていただきました。気候は幸いちょうど仙台よりも少し寒いという程度でした。着いたのが夕方であったため道路が非常に混んでおり, 市内まで車で1時間半ほどかかりました。韓定食レストランでのレセプションには現 KADR 会長 Choi Boo-Byung 教授, Kim Ju-Whan 初代 KADR 会長 (大韓民国学術院正会員), Kim Myung-Kook 元 KADR 会長, Nahm Dong-Seok 次期 KADR 会長などのお歴々, Kyung Hee 大学の実行委員の先生方, 翌日の Opening Ceremony において 2001 年に幕張で開催される IADR のプロモーション・スピーチをされる予定の黒田敬之先生, もう一人の Special Lecture を行う現 NIDCR 査読員である Dr. Shin Yong-Ae がお見えになりました。外は零下の寒さでしたが, 暖かいオンドル (床暖房) の部屋で頂く本格的な韓国料理はそれぞれとても味わい深く, また多くの先生方がとても流暢な日本語をお話しになり, とても和やかな宴でした。

初日の Opening Ceremony では Choi 会長, Kim 初代会長, 黒田先生らとともに壇上に上げていただきました。胸に付けていただいたブーケは深紅の薔薇の花とかすみ草に, 椿の葉が添えられているのがとてもユニークで印象的でした。Kim 初代会長, Choi 会長のスピーチの後, 黒田先生は来る 2001 年 6 月 27 日から 30 日に幕張で開かれる IADR が KADR と協賛になること, 是非韓国からもたくさんの参加者を期待する旨のスピーチをなさり, さらにプロモーション・ビデオの放映がありました。

その後自分の講演になりましたが, 予想よりもはるかに多くの聴衆が会場にいて, ほっといたしました。講演の最初に片言の韓国語で挨拶をすると拍手をいただき, その後は英語でした

がりラックスして15年余の研究成果を無事に発表することができました。

残念ながら一般演題は韓国語でしたので, ほとんど理解できませんでしたが, スライドは英語のものが多いので, どのような内容かは知ることができました。幸い Dr. Shin の講演は英語でなされました。彼女は高校まで韓国で過ごし, その後アメリカ合衆国に留学して大学, ポスドク時代を経て, NIH (米国立衛生研究所) で長い間研究費申請書の評価をする立場におられ, まもなくご定年を迎えるということでした。最近では NIH の中でも NIDCR (National Institute of Dental and Craniofacial Research) という, 歯科と関係の深い研究所に所属していらっしゃいます。Dr. Shin は “What's in a Face?” というタイトルのスライドを最初に示され, Quality of Life (QOL) の為には顔面口腔の健康がたいへん重要であること, 歯科という狭い領域にとらえるのではなく, 複合的な研究が為されるべきであること, その為にはさまざまな形での共同研究が必要であること, さらにこれから NIH の研究費に国際部門が独立し, 外国からの申請を促進する予定であることなどを話されました。KADR に来てそのような有意義な講演を聴くことができたことから, 今回の機会を与えて頂いたことを改めて感謝いたしました。

学会は他にシンポジウム8題, 口頭発表83題, ポスター発表23題があり, すべて Kyung Hee 大学校歯科大学の講堂およびセミナー室で行われ, 会場は少し狭い気もしましたが, 逆にアットホームな雰囲気がありました。関係者の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。また, Kyung Hee 大学校・歯科大学・口腔解剖学講座非常勤講師の Jue Seong-Kuk 先生には大学内を案内していただきました。Kyung Hee 大学は私立総合大学でとても綺麗なキャンパスで, 建物のいくつかはテレビドラマのロケにも使われることが多いとのことでした。また, ソウル国立大学校歯科大学矯正科レジデントの Kim Yoo-Ji 先生にはソウル市内をガイドしていただきました。多くの方々の暖かいホスピタリティに感謝また感激しつつ, 初めての韓国出張を無事に終え帰国の途につきました。

21世紀を目前に控え, 世界はますますグローバルなものになりつつあります。日本と韓国はアジアの中で最も近い隣国であり, JADR と KADR の交流が益々盛んになることは, 歯科ならびに顎顔面分野の研究発展の為に重要なことと考えられます。今回の訪韓で得た経験を生かし, 微力ながらも貢献出来ればと思っております。貴重なまた有意義な経験の機会を与えて下さいました岡田会長を始め JADR 関係者の方々に深く感謝しつつ, KADR 参加のご報告とさせていただきます。

### Ⅲ . 第 78 回 IADR 総会 ( Washington, DC ) 特集

#### 1 . 2001 年につながる Japan Night の盛り上がり 事務局長 奥田 克爾 ( 東京歯科大学微生物学講座 )

第 78 回 IADR Washington, DC 大会は、今までにない多くの演題数と参加人数であった。総演題数は 3,880 にも達した。また、Plenary session, symposium など多彩な内容の濃いものも多く、目白押しの会場が少なくなかった。それらを反映することもあって GC 社のスポンサーで開催された 4 月 6 日 ( 火 ) の Japan Night の盛況は、未曾有とも思えた。IADR Eli Schwarz 事務局長の挨拶に続き JADR 岡田 宏会長の 2001 年 Makuhari 開催の第 79 回 IADR へ一人でも多くの参加を呼びかけたスピーチがなされた。ユニークだったこともあり、その全文を記した。次いで IADR ならびに JADR が支援をもらっている GC 社の中尾 眞会長のスピーチがなされ、来年の大会には GC 社の 80 周年記念にもあたり協力することなどの内容の挨拶がなされた。

Japan night といえば、過半数が我が国からの参加者と錯覚する会員もいるだろうが、IADR の会長、次期会長、副会長および過去の会長などの参加者で日本人は 3 分の 1 程度であったような気がする。JADR のメンバーが中心となって Anesthesiology Research Group の設立が認可され、東京歯科大学麻酔科の金子謙教授がグループの president となった。

いずれにしても Japan night の盛り上がりが 21 世紀最初の IADR 幕張大会の成功につながって欲しいと願うばかりである。

JADR president address at Japan Night

Hiroshi OKADA

On behalf of Japanese Association for Dental Research I would like to express my sincere gratitude to all of you for coming to this reception. It is our great pleasure to find that 'Japan Night' is getting more and more popular through your warm friendship. Please refresh yourself. Because you have paid high attention every day to the scientifically exciting meeting here, I want to remind you that the next IADR meeting will be held in Japan in 2001. We may be unable to host such a magnificent meeting as AADR and CADR have done. But we must do our best under the leadership of Dr. Takayuki Kuroda, Chair of Local Organizing Committee and we are convinced that the meeting will be a success with your kind support and collaboration which are exactly IADR spirits.

IADR is, as all of you know, led by IADR president, officers and board members. Among them the Executive Director has particularly heavy responsibility to make the general session successful every year. We are very much happy to have a wonderful Executive Director, Dr. Eli Schwarz. On behalf of JADR, I'd like to say many thanks for his

great effort to encourage us by giving this very small gift.

This is a miniature of a warrior's helmet, Kabuto in Japanese, made of an enamel decorated porcelain produced in the best known place, Kutani in Japan. Kabuto was an important item for a General warrior to demonstrate his heroism in the old days in Japan. You must find a picture like this helmet on the circular of IADR 2001 in Makuhari when you came in. That is drawn on a kite. Makuhari, the place of the next IADR is famous for flying a kite. So Kabuto is one of the heroic symbols for male. And this is displayed at our houses for wishing our boys happiness and prosperity when they grow up. May 5th is a day of Boys' Festival, Japanese National Holiday.

A replica of a Kabuto helmet can easily be made from a piece of paper like this (President Okada put it on Eli's head). The paper is a Today's Newspaper, USA Today. We call it paper folding, Origami, a Japanese unique traditional art. If colored paper, it must be very much beautiful, as you imagine.

We very much hope that the next IADR meeting in 2001 will be an open - gate for the new Century, the 21st, and a mile stone for the Frontier of Oral Science. I urge you so please attend the meeting and I also recommend you to enjoy beautiful Japan and Japanese wonderful culture after the meeting. I must say another word that Japan is not so expensive as many of you think. You will recognize everything in Japan except land and housing is reasonably priced. You can recognize it through a second circular on the desk at the entrance of this reception room. We strongly hope to see all of you again in the next IADR meeting in Japan.

Lastly I have to say many thanks to Mr. Makoto Nakao, President of GC Corporation for supporting and sponsoring 'Japan Night' since the Singapore meeting in 1995. I would like to introduce him to you. Thank you very much for your kind attention, and please enjoy the reception.



会場写真

## 2. 第78回 IADR 大会に参加して

中林 宣男 (東京医科歯科大学生体材料工学研究所)

第78回 IADR が4月5日から8日, 2000年を記念してアメリカの首都ワシントンで開催された。発表演題数は過去最高で3,880題あったし, 登録参加者も過去最高であったようである。特に, ブラジルからの演題, 参加者が多かったように思った。筆者は主に Dental Materials のセッションに出席した。IADR は各リサーチグループが企画, 運営を分担しており, 2000年を記念した行事が組まれていた。

2001年は21世紀第一回の大会が幕張で行われるのであるが, 21世紀初年を記念する企画の準備に後れをとっているような気がしてならなかった。幕張での IADR が記念大会にふさわしい大会にすべく, 企画を盛り込むべきであったと, 今頃になって反省をしている。学会の企画力はアメリカのグループの方が長けていることを認めざるを得ないし, これが日本の研究レベルを反映していないことを願う。会員各位は企画でちょっと後れをとった分, 一般演題の質で勝負していただきたく思う。

申込み演題の7%が非採択になったそうである。アブストラクトを書くガイドラインにそって, 目的, 仮説, 実験方法, 結果, 考察, 結論をはっきりと明記すると非採択にはならないようである。日本からの申込みの中に, 内容が盛り沢山すぎるケース, 目的が不明なケースが多いらしい。2001年を目指して, 2000年のアブストラクトを良くお読みになることを勧める。

今年の学会では, かなり多くの日本からの先生方が口頭発表をされていたように思う。ポスター発表も良いが, 多くの人に自分たちの研究を知らせるには口頭の方が有利である。一方, 研究者同士で激論を戦わせて研究の進歩を早めるにはポスターに限る。演題数の増加と会場の関係で, ポスター報告の割合が増える傾向にある。両者の中間的位置づけの口頭ポスター報告もあったが, 筆者の出席した会場では座長の進行のやり方, ポスターの作り方等にもう少し工夫が欲しかったように感じた。予めポスターを掲示して参加者が見終わってから, 口頭で要旨を述べ, 議論するスタイルができれば有意義であったのではないかと感じた。いろいろなトライをしてみる必要があろう。

Dental Materials では, 889題の演題の内, ポリマーが228, 金属が88 (合金74, 重複がある), セラミックスが137題であった。コンポジットレジン比率が高く484, 接着が340, マイクロリーケージ102題であり, 重複は当然ある。義歯床の研究報告は日本からのものが目立った。今年は歯科用のモノマーを合成する研究のセッションが独立しており, 新しい素材に対する要求が強いと感じさせた。

象牙質への接着はマイクロリーケージを防止するために研究されてきたのに, マイクロリーケージと接着が同居している報告が目立ち筆者を嘆かせた。筆者は樹脂含浸象牙質を確実に作れば, マイクロリーケージは完全に防げると報告してきたつもりである。マイクロリーケージの研究法や評価法は歴史的に確立され, これらの研究をしてきた研究者が多いのだと慰めてく

れる人もいた。特にドイツとブラジルからの研究報告が多かったように感ずる。一部の材料の接着に対する信頼性不足もあると考える。まだまだ, 象牙質への接着が可能になって20年とその歴史が若いこと, 象牙質に接着する材料と称されても接着しない材料が多かった歴史的事実を踏まえると, これでも世界の人に象牙質への接着を理解してもらえるようになったと満足すべきなのかも分からない。

Evidence baseにのっとった研究や治療が大切であることは事実であるが, それが非科学的解釈に基づいた evidence であるように思えるケースがあり一抹の不安を覚える。研究が進行中の場合, それが正しいことを願うが, 歴史的に解釈が確立するまでは, 誤解であるケースもあることを肝に銘ずべきであろう。直ちに正しいと評価できるような研究は, 既に研究ではなく, 確認的な作業であるケースではなからうか。科学の進歩により, 定説が覆ったケースはいくらかもある。

IADR で表彰を受ける先生が, JADR の会員数に比べて少ない。どうやら私たちはボランティアと言う社会的貢献を重視する教育を受けていないため, 軽視する傾向があるらしい。IADR で座長をされる先生は極端に少ない。シンポジウムの企画をされている先生も同じである。ただ自分たちの研究を報告する場として IADR を利用しているだけではないか。他の研究者の報告に質問することも学会への一つの貢献策である。IADR で表彰を受けるには, 研究のインパクトもさることながら IADR への貢献が大切のようである。ご自分の研究グループの会員となり, そのビジネスミーティングに出席し, 学会のあり方や研究の動向などについて発言をし, 自分のやっている研究を基にシンポジウムを企画立案し, 演者もつとめるようになると表彰を受けるチャンスがぐっと増えると考える。若い先生方の努力をお願いしたい。勿論, 毎年 J. Dent. Res. に載る表彰候補者の公募要領に従って, 日本人が仲間の中から候補者を推薦しなくては始まらないことも事実である。これはと思う外国人研究者を推薦してみる方法もあろう。

## 3. Dental Material Group について

村田 比呂司 (広島大学歯学部歯科補綴学第二講座)

2000年4月5日から8日にかけて, 第78回 IADR 総会が, 第29回 AADR と第24回 CADR と同時開催というかたちで, アメリカの首都 Washington, DC で開催されました。なお Hatton Awards Competition の審査は前日の4日より行われました。御存知のとおり Washington, DC は政治の中心として町全体が機能しており, 一方計画に基づいて設計された公園都市でもあり, そのため芝生でおおわれた区画がたくさんあり, 緑が多いなという印象を受けました。

今回の IADR の演題数は3,880で, そのうち Dental Material 関係に分類されていた演題は約900題あり, 全体の約23%を占めていました。私たちの講座からの演題は5題で, 私は浜田泰三教授および McCabe 教授の指導のもとティッシュコンディショ

ナーの開発に関する演題を、英国 Newcastle upon Tyne 大学との共同研究というかたちで発表させてもらいました。両教授ともそれぞれ1999年および1998年に IADR で受賞された先生で、指導者に恵まれ感謝しております。朝7時半からポスターを張り、11時より1時間15分討論が行われました。ここでは同様の研究をしている大学関係者以外に、企業の方からの質問もあり、大学の先生とはまた違った観点から研究をみられており参考になりました。私自身は1989年のアイルランドで開催された IADR ではじめて発表しました。以来できるだけ発表するよう心掛けていますが、IADR ではもちろん発表し研究の動向を探ることがもっとも重要な目的の一つですが、以前留学して指導を受けた先生やそこで知り合った友人、あるいは幾度か研究室を訪問してお世話になった先生方と、再会し研究上のディスカッションやプライベートの話題などをかかわるのも重要なことだと思います。今回は共同演者で留学中の指導教官である Newcastle upon Tyne 大学教授の McCabe 先生や、義歯床用レジンや裏装材の吸水などの研究をされているロンドンの Queen Mary and Westfield College の Parker 先生らと再会でき、ポスターの前でディスカッションをさせてもらいました。

IADR ではシンポジウムや一般演題の他、Lunch & Learning やレセプションが催されています。その分野で有名な先生をスピーカーとして一つのテーマについて昼食をとりながらディスカッションする Lunch & Learning は今回は25題あり、そのうち3人の日本の先生方がスピーカーとして参加されていました。今回は一つのテーマにつき9名のみでの参加で、わたくしは申し込みが遅く人数がいっぱいということで参加できませんでしたが、聞きたいテーマのスピーカーが以前留学し指導を受けた先生 (Prof. McCabe) でしたので、あとで説明していただきました。Dental Material のレセプションは5日の6時より Grand Hyatt Washington ホテルで開催され、わたしと研究をしている大学院生と参加しました。ここでは Dental Material 関係で有名な先生がたくさんいらしており、特に Dental Material のエディターをされている DC Watts 先生と親しくお話しさせていただき、非常に温厚そうな先生で、自分にとっては大きな喜びでした。

最後に、2001年幕張大会(第79回 IADR 総会)の成功を祈りつつ、簡単ではございますが、第78回 IADR 総会の報告とさせていただきます。

#### 4. Plenary lecture: Sequencing the entire genomes of free-living organism: the foundation of medicine in the new millennium

安孫子 宜光 (日本大学松戸歯学部生化学講座)

ゲノムサイエンス研究の飛躍的な進展に伴い、ヒトゲノム計画 (HUGO) が進められている。開始した当初は、少なくとも数十年を必要とするであろうと予想されていたこの壮大な計画も、来る2003年にはヒト遺伝子の全塩基配列の解明が終了すると報じられている。Selera Genomics は、複数のヒト個体のゲノ

ムシーケンスのラフドラフトとともに約300万の SNP (single nucleotide polymorphism) データベースを2001年までに作成するとアナウンスした。これを契機にこの動きは大手製薬会社に波及し、Selera と同じ戦略で SNP データベース作成の競争が始まっている。単に SNP データベースの完成が製薬会社の最終目標ではもちろんなく、多因子疾患遺伝子の単離の競争に打ち勝って少しでも早く遺伝子診断の開発、創薬に応用したがることは明確である。

このような背景のなかで、Millennium 2000, IADR の最終日 (4/8), Celera Genomics, Chief Medical Center の Executive Vice President である Dr. Sam Border が "Sequencing the entire genomes of free-living organism: the foundation of medicine in the new millennium" の題で Plenary Lecture を行ったのは、この分野での研究が立ち遅れている感が否めない歯科医学界にとってタイムリーな必然性を思わせた。

DNA ミスマッチ修復、免疫機構の破綻を引き起こす遺伝子変異などによる発癌メカニズム、HUGO 計画の現状、ヒト以外に主として原核細胞ではあるが、すでに約20種類の生物のゲノム計画が終了していること、すでに死滅している生物、たとえばマンモスでも凍土から発掘される冷凍組織を用いてゲノム計画が可能であることの紹介で Lecture が始められた。ついで、疾患遺伝子の同定、単離に有用な SNP 解析が説明され、そのデータベースの蓄積に、各人種、個人の染色体、ミトコンドリア DNA のショットガンシーケンスがいかに有用であるか説明され、その戦略として高密度 DNA chip, cDNA microarray などの解析技術が紹介された。心疾患、ハンチントン病、アルツハイマー、ALS、癌、糖尿病などの原因遺伝子が解明され、これらの遺伝子が基本的には *Drosophila melanogaster* にも存在することがわかっていること、そして、ホメオボックス遺伝子である Pax6 遺伝子の異常によって、ハエでもマウスでも、そしてヒトでも視覚障害を生み出してしまう例が紹介された。この事象を例にゲノム解析プロジェクトはヒト遺伝子だけが対象ではなく、ヒトゲノム計画はただ単なる始まりであって、今後、種々の生物について行われるべきであり、実際にその方向に進むのは確実であることが語られた。そして、ポストゲノムサイエンスの問題としては、遺伝子配列からのタンパク質一次構造をもとに、立体構造、転写因子の結合部位配列、タンパク質間の相互作用、配列モチーフ、タンパク質ドメインのモジュールなどの Proteomics が進展し、これらの機能的な情報がデータベースとして蓄積され、いわゆる Proteome 時代を迎えるであろう、そして情報処理技術としてのバイオインフォマティクスがますます発展していき、最終的にはゲノム情報から生命現象のシステムを再構築できる時代がやがて到来することを考えさせられて講演が終了した。フロアーからノックアウト、トランスジェニックマウスの応用についての質問がされ、これに対してヒトに存在する基本的遺伝子はほとんどマウスにも存在する、ヒトの疾患のほとんどすべてがやはりマウスにも存在しうることから疾患のリンケージ分析、疾患遺伝子の同定、機能解析などに有用ですすでに



多大な成果がえられていると答えられた。

私見として、今年のFASEB総会ですでにDNA chip 解析のセッションが設定されているのに対して、本IADR学会ではこの新技術を本格的に応用した発表は期待されたほどなく、いよいよ歯科医学界が本腰で歯科疾患へのゲノムサイエンス応用研究に取り組みないとますます取り残されてしまう危惧を感じた。

### 5-1 . Hatton Awards Competition に参加して

檜山 成寿

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面治療学講座)

2000年4月5日より4日間の会期で、第78回IADR総会がWashington, DCのコンベンションセンターで開催された。Hatton Awards Competitionは、開会の前日(4月4日)に、同会場の一室にて行われ、日本から参加した5名とAADR Hatton Awards competitionのfinalist 5名を含む22名が、Competitorとして参加した。5名のrefereeがポスターを取り囲む中で、5分のポスター説明に続き8分の質疑応答があった。タイムスケジュールとしては遅れることなく進行し、ほぼ時間通りの発表であったためか、入室から退室までがかなり短く感じられた。私の場合、5名のrefereeのうち、実際に質問してきたのは僅かに2名であり、質問数は3問ほどであった。これで本当にjudgementが可能なのだろうかという一抹の疑問を抱かなかつたわけではないが、歯科研究がきわめて広範にわたり、また極度に専門化しているため、仕方ないこととも思われた。大会2日目に、Travel Awards Presentationがあり、参加者全員にcertificationが贈られた。また、それに引き続きピュッフエスタイルのレセプションが行われ、参加者および関係各位が歓談のひとときを過ごした。レセプション会場にて、今回のHatton Awards Competitionのrefereeの一人である東京医科歯科大学の柳下教授にお話を伺うことができた。先生の貴重なご意見を私一人のものにしておくのはもったいない。その概要を以下にまとめさせていただく。

1) Judgementの基準は、ポスターの説明が5割、質疑応答の内容が5割となっている。前者に関しては日本人は比較的高い点がとれるが、後者の質疑応答に関してはどうしても点がとれない。

2) 質問に対し分からないことがあっても、「分からない」とは口が裂けても言ってはならない。「自分なら~のように推測する」でもいいから、自分の意見を伝えるよう努力する。この点が、日本人が最も苦手とするところであり、差の出るところである。

3) 2)の点に関しては、機会をみつけて国際学会に積極的に参加し、質疑応答のノウハウを身につけるよう努力する。

4) いかに完璧にpresentationするかではなく、いかに簡潔に分かりやすく説明するかを心掛ける。Referee5名のうち、おおよそ説明が理解できるのはせいぜい2名くらいなもの。残りの3名のrefereeを含めて、どれだけ簡潔に説明し、理解が得られるかが問題。研究の多くが、広範な歯科研究の中にあって重箱

の隅をつつくような性格を有するために、つい自分の研究に関しては細かい点まで説明したくなる気持ちは皆同じだが、このような贅肉をいかに省くかが重要である。

柳下先生の貴重なお言葉は、言われれば確かに納得できる、というよりはむしろ、言われなくとも頭では分かったつもりでいたことかも知れない。しかしながら、これを真に実行するには、相当の経験と努力を要することは確かであろう。2001年には日本で開催されるIADR総会、是非日本人がwinnerとなってくれることを願っている。

### 5-2 . Hatton Awards Competition に参加して

大山 秀樹(岡山大学歯学部歯科保存学第二講座)

今年、私は幸運にもHatton Awards Competitorとして発表する機会を与えて頂いた。CompetitionはIADRのセッションが開始する前日に行われた。今年はpost-doctoral カテゴリーのノミネーターが22名、pre-doctoral カテゴリーにノミネートされた者が15名であった。Japanese Divisionからのノミネーターは私を含め、今年も5名であった。朝の7時45分までにポスターを掲示し終わらないといけないうということもあって、ホテルをまだ朝も明けきらないうちから出発したことを昨日のこのように思い出す(アメリカ人は朝が早いということからすれば当然のことかもしれない)。審査は一人のノミネーターに対して20分間おこなわれる。その内訳は5分程度のプレゼンテーションの後、7分間のディスカッションが行われるというものであった。今年もまた日本人のノミネーターは一位、二位を受賞することはできなかった。これには以下に述べる二つの原因があると思われる。第一に、英語の語学力の問題である。私も含めて日本からのノミネーターの多くの先生方は、審査の際に審査員の先生方が出される質問は理解できたとしても、それに対してとっさに、しかも英語で評価に値する回答を行うことに「少し難あり」と思われているのではないであろうか。事実、私も質問内容を思い返して「あの質問にはこのように答えれば良かった」とほぞをかむ思いをしながら、審査会場を後にした。しかし、それ以上に日本人ノミネーターが賞をとれない障害となっているのは、日本人の基本的な素質である「ディスカッション下手」(質問に対して展開的な回答をしない)にあると思われる。

その対策として、日本人審査員のある先生は、国際学会での英語の発表を原稿無しに行なわなければならないことを力説された。その理由は、1)原稿無しに英語で発表を行うことが、たどたどしい英語で言いたいポイントのみを強調するが故に、相手を十分理解させることに繋がる、2)自分が伝えたいポイントは何かということをはっきりさせ、それを明確に伝える練習となる、ということである。最近、文部省は、日本における第二外国語を英語として定め、大学を卒業するまでに自由に自分の考えを英語で話せるような教育システムを構築することを目指すという基本姿勢を打ち出した。このことが実現することに



よって、語学の面で、日本人の behind は克服できるかもしれない。しかし、それだけでは日本人ノミネーターが受賞しないことの解決とはならない。日本で開かれる学会において、練習し、「ディスカッション下手」を克服するべきではないであろうか。これらのことを日常行うことによって、ここ十数年来受賞のない日本人ノミネーターが世界で対等に渡り合えるようになることが期待される。さらに来年度からは応募者区分に変更が加えられることもあり、この Competition が盛況になることが予想される。

## 5-3 . Hatton Awards Competition に参加して

牧平 清超 (広島大学歯学部歯科補綴学第二講座)

2000 年度 IADR 総会が、Washington, DC で開催されました。清潔感あふれる緑豊かな街並みというのが、私の Washington, DC の第一印象でした。また、Washington, DC はポトマック川の桜が有名です。学会開催が4月初旬ということで、この桜を楽しむにしていたのですが、満開時期は例年より早く残念ながらお目にかかることは出来ませんでした。

Hatton Awards Competition に日本代表として参加させて頂いた本総会は私にとって非常に思い出深く有意義なものとなりました。今回は、“The adhesion of *Candida albicans* to intact and denatured collagen” というテーマで Hatton Awards Competition に臨みました。Hatton Awards Competition は、第10代 IADR 会長の Edward Hatton 博士の功績を称え設けられた若手研究者を対象とした Competition です。本年度はポストドクトラル部門へ JADR から5名参加しました。参加選考は、まず書類選考があり、そこで選ばれた者はその年の JADR 総会で発表が義務づけられています。JADR 総会では、多くの先生方に Discussion していただきました。この場をかりてお礼申し上げます。そして、IADR 総会前日に行われる Competition が本番となります。Competition では、審査員の前で研究内容を説明し、いくつかの質問に答えなければなりません。もちろん国際学会なので英語の質疑応答となります。採点の際、Presentation の比重が非常に大きいと聞いています。Presentation を重視する点はアメリカ的(ショー的?)といえるのかもしれません。自分自身では、十分な準備のうち本番に望みましたが、やはり緊張(実力?)のため満足のいく Presentation が出来なかったことは非常に悔やまれます。しかし、その日の夜は学会前夜祭ということで、医局の先生方とカフェで食事をして盛り上がり、その悔しさもその時ばかりは吹き飛んでいたように思います。そのカフェの雰囲気は、私にさらにアメリカを感じさせてくれました。私達以上に周りのアメリカ人は陽気に唄い踊り、そして食事を楽しんでいたからです。

学会初日のオープニングセレモニーでは、各部門の上位2名が Hatton Awards として表彰されますが、残念ながら本年度の日本人の受賞はありませんでした。また、翌日に Hatton Awards Competitor は、IADR/Unilever Travel Award Reception に招待さ

れ、全員に Travel Award が授与されました。このパーティーでは、審査員の先生方のお話を伺ったり、各 Division の参加者とお互いの研究について話す機会もあり大変刺激を受けました。今後の研究に生かしていきたいと思います。余談ですが、IADR は Unilever のような企業とうまく協力して研究を推進していることに、またアメリカを感じました。

短いですが、私の Hatton Awards Competition レポートとさせていただきます。また、幕張で開催される 2001 年度 IADDR 総会の成功を心よりお祈り申し上げます。

## 5-4 . Hatton Awards competition に参加して

橋川 智子

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座)

この度、2000 年 IADR Hatton Awards Competition に JADR からの候補者として(演題 Regulation of Cellular Function of Gingival Fibroblasts by Adenosine)として、参加させていただきました。昨年 11 月の JADR 学術大会において同内容をポスター発表させていただいていたとはいうものの、IADR 学術大会における本番の審査会場では、研究目的、方法、結果、結論はもちろんのこと、自分の研究が歯科分野において、どれほど貢献する研究であるかを、制限時間 5 分という短時間内にしかも英語で口頭発表しなくてはならないという点に大変骨を折りました。さらに発表後の質疑応答では、あらかじめ質問が準備されていたのではと思われるほど、次々と的を突いた質問を受けました。

私の英語力では自分の言いたいことが 100 パーセント伝わったかどうか疑問でありましたが、これから研究を続けて行く上で、英語での理解力と表現力の必要性を痛切に感じる事ができました。さらに、今回の Washington, DC 滞在中に、我々の講座の村上伸也助教授が留学先されていた NIH(NIA) のリチャード・ホデス所長研究室に村上先生と御一緒し、現在進行中の研究内容に関する discussion の場に同席させていただき、貴重な体験をさせていただきました。また、NIDCR のビルケダール・ハンセン博士にもお会いし、今回の私の研究発表内容や歯肉線維芽細胞の機能や歯周組織再生療法に関して意見交換をする機会を持つことができ、このことも良い思い出となりました。

このような国際学会において自分の研究内容を発表するという貴重なチャンスに恵まれましたことは、間違いなく今後の自分自身の研究者としての糧になるものと思われ、今後も頑張って精進していきたいと思えます。

最後に、Hatton Awards Competition の JADR からの候補者の 1 人として今回発表する機会を与えていただきましたことを深く感謝いたします。また、本研究をご指導いただきました岡田宏教授、学会期間中を含め今回の私の研究発表をいろいろと支援して下さいました村上伸也助教授、鳥袋善夫先生をはじめとする医局の諸先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 5-5 . Hatton Awards Competition に参加して

米澤 英雄 (東京歯科大学微生物学講座)

4月5日から8日の会期で、Washington Convention Centerで行われた78th General session of the IADRに、Hatton Award 候補者として参加しました。Competitionは一般のセッションが始まる前日の4月4日にポスターセッションの形式で、PRE-DOCとPOST-DOCとに別れてそれぞれ別の会場で行われました。発表時間は5分と短い時間で何を話せばよいのか非常に難しいものでした。その後続く質疑応答は7分で、英語での討論が初体験の自分には苦しく長い時間でした。会場内は関係者以外立ち入り禁止で、独特の雰囲気の中で行われました。朝7時からポスターのmountが始まり、9時より発表が順次行われました。自分の発表時間は12時からの予定なので一度ホテルに戻り、予定時間の少し前に会場に行くと、ドアの窓から中の様子を見ることができ、いよいよ始まるのだと緊張感が募ってきました。少しでもその緊張をなくそうと原稿を読む練習をしていると、Norwayからの候補者で自分の次に発表を行うDr. L.L.Loroとそのmentorが励ましてくれました。発表では目的を簡単に述べた後、結果を表や図を追いながら説明し、最後に結論を簡単に話す程度のものでした。あらかじめ講座の先生方をはじめ、さまざまな先生方に協力をしていただき、どのようなことを聞かれるかを想定してそれに対する答えを用意しておきました。難しい質問ではなく基本的な質問に対してきちんと答えられるようにしておくようにというアドバイスをいただいたので、このことを考えながらおよそ20以上の質問とそれに対する答えを用意しておきました。しかし、聞かれた質問は考えていたものよりもさらに基本的なことでした。普段の研究では考えもしないで行っていることも、なぜそうしているのかという事を考えることが必要なのだと知らされました。質疑応答のほうは、考えていた質問を聞かれないことで、必要以上に舞い上がってしまったことと、その質問に対して自分が思っていることを流暢に話すことのできる英語力も無いためにほとんどの質問に答えることが出来ず、審査員に苦笑いされる始末でした。

この日の発表のほかに学会最終日にポスターセッションがありました。ここで初めて他の competitor のポスターを観る余裕が出来ました。全体的には、やはり分子生物学の発表が多かったこと、ポスターは1枚刷りのポスターが主流であると感じたこと、POST-DOCでwinnerとなった人の研究は、自分と同じ分野で自分と同じ細菌、しかもproteaseについて研究した人であることが分かり、悔しさでいっぱいでした。今回この学会に参加してみて、あらためて英語力をbrush upする必要性が身に染みて分かりました。あるオーラルセッションにおいて、座長が「次のスピーカーは日本人なので質問はゆっくりと、わかりやすい英語でしてください。」と言っていたのが印象に残りました。

## 6 . Craniofacial Biology Group と NIH について

福本 敏 (長崎大学歯学部小児歯科学講座)

今回ワシントンを訪れた大きな目的は二つありました。一つはIADRの総会に参加してポスター発表をおこなうこと。もう一つは海外留学を予定しているNIDCR (National Institute of Dental and Craniofacial Research) のCraniofacial Developmental Biology and Regeneration Branchを見学することでした。まず学会についてですが、ワシントン・コンベンションセンターという周囲にはワシントンの観光名所が集中して存在する地域の一角にあります。初めての国際学会での発表ということと、「ワシントンは危険だ!」という先入観で、道を歩くにも、また学会場をまわるにも緊張しながら過ごしてきました。実際地元に住んでいる人の話を聞くと、確かに一部の地域(東側)は危険らしいのですが、西側は比較的安全とのことと、ワシントン2日目ぐらいからは夜も遅くまで出歩いておりました。地下鉄もニューヨークなどくらべると非常に安全で、きれいであり、ホテルの近くのデュポン・サークルからメトロ・センターまで何度も往復しました。あと、僕の緊張を軽減してくれたのは学会に参加している多くの日本人でした。カフェテリアで休憩していても、どこからとも無く日本語が聞こえてくるぐらい日本人が多いのにびっくりしました。しかし日本人と思って話し掛けたら中国の人で、相手も日本語で話し掛けられて非常に迷惑そうな顔をしていました。本題の学会では神経再生および神経細胞死の抑制に関して糖脂質の役割について発表いたしました。糖脂質を口腔領域で研究している人が全く皆無であり、少し安心した反面、積極的な議論ができなかった点が残念でした。また他の会場でも日本人同士の質疑応答をよく見かけ、せっかくの国際学会なんだから積極的に他国の人と議論すべきではないのかな?と疑問に思う点もありました。次にNIHの方ですが、巨大な敷地(施設内で警察がスピード違反の取り締まりをしているぐらいです)に現在建設中のもも含めて50ものビルが立ち並び、かつ非常に緑の多いところでした。場所はメトロのレッドラインにのってメディカル・センターで下車すればすぐのところでした。場所はベゼスタというところで日本でいうところの田園調布と言った感じです。(これは地球の歩き方の言葉をそのまま使いました。)たしかに治安もよく、おしゃれなお店が立ち並んでおりました。近くにはあのPubMedを作製している図書館があり、またFDAもありといったところで非常に感動しました。施設の中は蛇口をひねればイオン交換水が流れており、毎日大量の試薬や実験器具が搬入され驚くことばかりでした。Building 10には過去この施設にいた人でノーベル賞を受賞したひとの名前が刻まれており、その多さに感動しました。今回はスケジュールの問題でワシントンでの観光がほとんどできなかったのが、いまでも心残りではありません。

最後に学会とは全く関係ありませんが、途中の空港であるステイブン・スピルバーグ(映画監督)と一緒にになり、わたしの下手な英語に一生懸命耳を傾けてくれたのが非常に感動いた

しました。

今回、このような私に JADR Newsletter の紙面をさいていただき、編集部の皆様に感謝申し上げます。

## 7. Craniofacial Biology Group について

檜山 成寿

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面治療学講座)

本大会における3,880の一般演題のうち、Craniofacial Biology Groupに属する演題数は229であった。演題数としては一割に満たないものであったが、Craniofacial Biology Groupを含め、全体が20のResearch Groupから構成されていることを考えると、Craniofacial Biology Groupは中堅的存在として位置づけられるものと思われる。また、Craniofacial Biology Groupに属する229の演題の中で、日本人が関係している演題数は26であり、ほぼ一割に相当した。

国際学会という性格から、国内の学会発表ではあまりお目にかかれない内容の発表がみられ、顎顔面および歯列の形態に関する人種差についての発表が多かったのが印象的であった。また、矯正治療結果について客観的な評価を求める動きも感じられた。一言でCraniofacial Biology Groupといっても、マクロ的視点からの成長発育に関する研究、矯正治療結果の評価等に関するものから、歯数および歯のサイズの遺伝子学的背景に関する研究や、口唇口蓋裂の原因遺伝子解析等、内容的に極めて多岐に亘っている。これらを全て理解することは困難であったが、以下、個人的に興味の惹かれた演題について、その内容を簡単に紹介したい。

矯正臨床において、歯列弓の拡大は、叢生の解消を目的として行われることがある。本法には大きく分けて急速拡大法と緩徐拡大法があり、前者に関しては上顎歯列弓に対して適用されるものであり、下顎歯列に適用することは一般には考えられていなかった。今大会において、Saint Louis Universityからの演題は、下顎歯列叢生の解消のために、下顎骨正中部に distraction を行い、急速拡大法を下顎歯列に対して行った20症例(平均年齢20歳)の予後経過を、非抜歯治療群および抜歯治療群と比較したものであった。結果的には、安定が一番悪かったのは抜歯治療群であり、次いで非抜歯治療群、最も安定がよかったのは distraction 症例であったとのことである。Distraction 症例の治療結果および安定に寄与する因子については、治療前後での基底骨幅径の変化、歯軸の変化等を含め、今後さらに検討する余地はあるが、ユニークな治療法に予後安定の保証が附加されれば、きわめて有用な治療法として期待できるものと考えられる。

従来、効果的な歯の移動には、continuous force が好ましいとされてきた。しかしながら、歯根吸収という側面も併せて考慮すると、intermittent force の方が好ましいとする報告もある。九州歯科大学からの発表には、この点を明らかにする試みの一端を垣間みることができた。ラットにおいて continuous force をかけた場合、確かに歯の移動は大きかったが、歯根吸収も大き

かった。一方、24時間当たり1時間だけ矯正力を加えた場合には、歯根吸収はみられなかったが、歯の移動もみられなかった。それでは、歯根吸収が最小限に抑えられかつ効果的な歯の移動が行える矯正力とはどのようなものかが興味のもたれるところである。生体の代謝系活動が休止期(睡眠中)に高まることから、この期間に歯の移動が大きくなるといった近年の報告も踏まえて、適正な矯正力の適用についてデータに基づく新たな知見が得られることを期待したい。

## 8. Prosthodontics Group について

菊池 雅彦(東北大学歯学部附属病院高齢者歯科治療部)

第78回 IADR のプログラムによると、今回の一般演題数の総数は3,880題であり、このうち歯科補綴学分野の演題数は201題であった。総演題数に対する補綴学分野の演題数を比率で表すと5.2%に相当する。周知のとおり IADR では専門部会として20のScientific Groupがあり、グループの会員総数に対する歯科補綴学のメンバー数の比率が昨年末の時点で約7%であることを考慮すると、今回の歯科補綴学分野の演題数はやや少ないといえる。

国別演題数では、主催国であるアメリカが92題(46%)と半数近くを占め、次いで、日本27題(13%)、ドイツ24題(12%)が続いた。意外なところでは、ブラジルが16題(8%)と健闘しており、イギリス(8題、4%)、カナダとオランダ(それぞれ5題、3%)を越えていた。他には、トルコが4題、クロアチアが3題、ベルギーが2題で、日本以外のアジア諸国では、韓国、台湾、タイからそれぞれ1題ずつと低調であった。

IADR では、Scientific Group に対応する分野ごとに演題を募集しており、歯科材料、インプラント、ニューロサイエンスなど日本では補綴学にも含まれる分野が、IADR では補綴学分野とは別に演題募集されている。しかし、今回の演題を内容別に見てみると、最も多かったのがインプラント関係の演題であり、インプラントの臨床評価や粘膜負担義歯との相違点に関する内容が目立った。これらの大部分はアメリカからの演題であった。インプラントとはば並んで多くみられたのがセラミックス関連の演題であり、オールセラミッククラウンの破折強度やエナメル質の摩耗に関する研究が目された。演題数ではセラミックスには及ばないものの、グラスファイバー強化型を含む硬質レジンに関する報告も少なくなかった。

インプラントや新しいセラミックス・硬質レジンなどの歯科材料に関してはアメリカからの報告が圧倒的に多いのに対し、顎口腔機能に関しては、演題数は10数演題と多くはないものの、その大部分を日本からの報告が占めていたことが特徴的であった。ここには、両国における健康保険制度の違いや歯科審美に対する国民の要求度の違いなどが反映されているものと考えられる。本来、歯科補綴学とは単に強度と耐久性、審美性を併せ持った材料を開発して次から次へと臨床応用するためのものではなく、修復物をいかに生体機能に調和させるか、いかに

安全かつ効率的に機能させるかを考究する学問である。IADRでは後者が一部ニューロサイエンス/TMJの分野に組み込まれているが、歯科補綴学分野においても、生体機能を常に念頭に置いた研究を充実させるべきであろう。IADRの歯科補綴学分野は日本の歯科補綴学と比較して、生体機能関連の研究の比重が低く、経済効果につながる歯科材料関連の研究にやや傾きすぎているというのが今回の率直な感想である。

## 9. Geriatric Oral Research Group について

池邊 一典 (大阪大学歯学部歯科補綴学第二講座)

Geriatric Oral Research Group は、グループが担当するどの会場に行ってもほぼ同じような顔ぶれがそろい、その時点の演題のみならず、昨日の発表も思い出しは活発に論議し合うといった感じの小ぢんまりとまとまった活気のあるグループです。

今回のIADRでのGeriatric Oral Research GroupのSession Titleを拾い上げてみるとEpidemiology, Survey, Oral Medicine, Oral and Systemic Disease, Outcomes, Oral Function and Quality of Life, となり、またシンポジウムは、Relationship between Chronic Disease and Oral Health: What is the Evidence?およびCross-cultural Perception of Oral Health and Oral-health-related Quality of Lifeでした。このように、話題の中心は、高齢者の歯科疾患の実態はもとより、高齢者における口腔の健康の意義や歯科治療によってもたらされる効果およびその評価法となっており、この傾向はここ何年かは変わっていません。またBusiness ReceptionがBehavioral Science/ Health Service Research Group と共同で開催されていることからわかるように、研究対象に医学的、身体的な事項のみならず、心理的、社会的、経済的な項目も含まれることが他のグループと際立った特徴といえるでしょう。

今回私が注目したのは、高齢者の唾液分泌障害と口腔感染症に関する研究で、Iowa大学のDr. Watkinsらのグループは、唾液分泌量とカンジダ症の関係について免疫学的方法を用いてうまく説明していました。また、口腔の健康および歯科治療の効果に関する評価法がここ数年のトピックスとなっており、研究者の間で少しずつ考えが異なるため、Toronto大学のDr. LockerやNorth Carolina大学のDr. Sladeらを中心に活発な論議が繰り広げられていました。現実はどういうことが問題になっていて、何のために高齢者の歯科治療を行うのか？それによってどういう効果(Outcome)がもたらされるのか？という疑問に科学的に答えて行かないことには、「歯を抜けば感染源はなくなる。栄養は流動食や点滴で十分。」というような短絡的な結論にもなりかねません。高齢者に関しては、単に歯の数や状態、また、咀嚼や嚥下などの機能のみならず、全身の健康への影響、心理的、社会的効果(Social Impact)等も客観的に評価し、わかりやすい形で表現する戦略が必要であるという印象を強く受けました。

何はともあれ、日本は現在世界一の長寿国で、数年のうちには高齢人口の割合が世界一になることは周知の事実です。高齢者歯科に関しても、シンポジウムのタイトルにもあるように、

まさに“ What is the Evidence? ”という疑問に耐えうるデータの蓄積が急務と思われました。

## 10. 歯周病学研究セッション「病因論 - 歯肉線維芽細胞とコラーゲン」に参加して

山田 聡

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学)

学会最終日の最終セッションということでもあり、さすがに盛況とまでは言えない会場であったが、そこにいる聴衆は真にこの研究テーマに興味ある研究者という印象を受けた。その中でそれぞれの研究発表に対して活発なディスカッションが交わされた。

歯肉線維芽細胞はコラーゲンなどの細胞外基質を産生し、口腔内結合組織の恒常性維持の中心的役割を担っている細胞である。歯周病罹患部位の炎症部位においては、歯肉線維芽細胞は局所で産生されるサイトカインやTリンパ球などの免疫担当細胞との細胞接着により活性化され、IL-1, IL-6, IL-8などのサイトカインやPGE2を産生する能力を有することや、IFN $\gamma$ にて活性化された線維芽細胞がTリンパ球の増殖反応を制御しうることが示されており、炎症反応にも積極的に関与しているものと考えられる。さらに、歯肉線維芽細胞の産生するコラーゲン分解酵素であるMMPの歯周組織破壊への関与や、組織創傷治癒・再生過程での分泌コラーゲンの重要性なども現在の歯周病学におけるトピックスとなっている。本セッションの演題は全部で8つあり、その中で興味深かったものを幾つか紹介する。

まず、最初の発表では、患者から歯周外科中に採取した全層歯肉弁組織に*in vitro*で人為的な創傷を作製し、それら組織片を*in vitro*にて培養することにより歯肉創傷治癒の組織学的過程を経時的に検討するというものであった。治癒過程で上皮再生、血管新生部位に於てコラーゲンタイプ4の産生が観察されたという結果であった。ボストン大学のグループはIL-1レセプターおよびTNFレセプター欠損マウスを使い、交配によりそれぞれのレセプターの欠損或いは両方が欠損した場合の歯肉組織の創傷治癒の違いを経時的に*in vivo*で比較検討するという非常にエレガントな研究発表を行った。その結果、これらレセプター欠損マウスではその創傷治癒が正常マウスと比較して、その初期の段階で遅れるというものであった。炎症性サイトカインの代表のようにとらえられているIL-1, TNFが組織創傷治癒過程でも重要な役割を担っていることが示唆され、歯肉線維芽細胞の歯周組織恒常性維持への強い関与が示された。また、興味ある発表として、Tリンパ球によるBリンパ球の活性化に重要な役割を担っているCD40分子-CD40リガンド分子の相互作用を、Tリンパ球による歯肉線維芽細胞の活性化の観点から検討した研究発表が、ロチェスター大学のグループよりあった。彼らは、歯肉線維芽細胞上のCD40分子を刺激することによりMMP-1およびMMP-9の産生量が増加することを見出した。

今回のセッションを含め、歯肉線維芽細胞の炎症反応および

創傷治癒・再生過程への関与の分子レベルでのメカニズムが次第に明らかになってきている。これら得られた知見をもとに、直接、分子レベルで歯肉線維芽細胞に働きかけることにより、歯周病での炎症反応、組織破壊、歯周組織治癒・再生過程を積極的にコントロールするという新しい歯周病治療法の開発が期待される。

#### 11. 第78回 IADR に参加して (歯周病原性菌と免疫に関する発表を中心として)

加藤 哲男 (東京歯科大学微生物学講座)

4月5日から8日の会期で、78th General Session of the IADR が米国 Washington, DC の Washington Convention Center において開催された。思っていたよりも暖かく、桜の花は終わっていたけれど、着いた数日後には ice storm が来て雪がちらついていた。

抄録に載っていた3,880演題(いくつか withdraw もあったが)のうち、微生物関係のものは "Microbiology/Immunology", "Periodontal Research", "Cariology Research" グループを中心に400題余りあった。そのうちの大体3分の1が免疫に関わる発表だったろうか。Oral Sessions では、細菌に対する抗体レベルと菌叢の関係や、病態と抗体レベルとの関係など歯周病マーカーとしての抗体レベルに関する発表や、病原因子に対する防御性免疫応答に関する発表があった。歯周病マーカーとしての IL-1 genotype の発表もいくつかあった。またサイトカインや接着分子関連の報告は、Oral Sessions, Poster Sessions を通じ数多く見られた。IL-1, IL-6, IL-8, TNF などの炎症性サイトカインに関するものや、サイトカインの抗体産生における働き、たとえば IgG 産生には IL-12 などの Th1 サイトカインが必要など、に関する報告があった。わたしは主に、「歯周病原性細菌と免疫」、あるいは「サイトカインと接着分子関連」の Oral Sessions に参加したが、いずれも聴取者が少なかったように感じた。会場が大きかったこともあるかもしれないが、なにか開散としていたように思う。そういえば発表者すら来なかったときもあった。最終日は、かなり人が減っていて、Poster Sessions 会場も前日までのような賑わいはなかった。コーヒー・コーナーも休憩所もかたづけられており、これは最後まで残しておいて欲しかった。

来年は幕張で開催されるわけだが、活気のある実り多い学会にしたいものである。

#### 12. 第78回 IADR に参加して (歯周病原性菌に関する発表を中心として)

君塚 隆太 (東京歯科大学微生物学講座)

4月3日出発して、Washington, DC で行われた 78th General Session of the IADR (会期: 4月5日~8日) に参加した。

5日のシンポジウム「Bacterial Invasion and the Host Response」は、まず歯周病原性 *Porphyromonas gingivalis* や *Campylobacter rectus* の硬組織への侵入が DNA プローブ法を用いて示された。歯髄、セメント質においてこれらの細菌が高頻度に分離されており、歯周処置後に硬組織がリザーバーとなりうるのが興味深かった。また「歯肉溝とバイオフィルム」という演題では、バイオフィルム中での多形核白血球 (PMN) と細菌との結合性について免疫組織学的に検討されていた。興味深いことにバイオフィルムに侵入した PMN と侵入していない PMN では形態が異なっており、侵入した PMN はネクローシスを起こしていた。このことから、バイオフィルムに対して宿主免疫は特異的な応答を起こすと考察していた。バイオフィルム形成のメカニズムについては、最近研究が始まったところであり、これからの研究の進展が期待される場所である。6日の「Cellular Microbiology」というセッションでは、宿主細胞への細菌の侵入について、細菌側からのアプローチについての報告があった。特に歯周病原性 *Actinobacillus actinomycetemcomitans* の侵入機構についてこの細菌のある種の侵入性タンパクが actin を収束させ侵入を行うと今まで主張していたグループが、今回 microtubule motor protein を用いて侵入するという報告を行った。この研究においては侵入因子のクローニングなどの分子生物学的な解析が待たれるところである。7日の「Oral bacteria: Genetics and Virulence」というオーラルセッションでは主に歯周病原性因子であるタンパク毒素、線毛成分、酵素などに対する分子生物学的解析が発表されていた。最終日8日は、Hatton Awards の presentations があり、日本から選ばれた方達も多いに注目を集めていた。

## IV . 第48回JADR総会・学術大会開催のご案内

大会長 安孫子 宜光  
(日本大学松戸歯学部生化学講座)

2000年度(平成12年)のJADR大会開催の第二回目のご案内を致します。

会員の皆様には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。さて、本年度の大会は、関係各位の御協力によりまして、特別講演2題、シンポジウム5テーマ22題を予定しております。下記の開催日程に是非とも一人でも多くの皆様にご出席いただきますようお願い申し上げます。

昨年のJADR総会・学術大会同様、本年度もAbstract Form等のJADR総会に関する書類は7月に各大学のJADR評議員のもとに郵送されております。歯科大学以外の方で書類をご希望の方は、JADR事務局(担当:大戸道子, FAX: 06-6873-2300)まで直接お申し込み下さい。なお、書類(Abstract Form等)の締め切りは9月9日です。

会期: 2000年12月2日(土)・3日(日)

会場: 日本大学松戸歯学部キャンパス  
〒271-8587 千葉県松戸市栄町西2-870-1

担当校: 日本大学松戸歯学部生化学教室

大会長: 安孫子 宜光 教授

準備委員長: 城座 映明 講師

内容: 一般口演、ポスターセッション、特別講演、シンポジウム、展示、その他

E-mail: 48jadr@ml.mascad.nihon-u.ac.jp

http://www.mascad.nihon-u.ac.jp/biochem/48jadr/

### 特別講演

1. From Benchtop to Clinic: Bringing New Science to Better Patient Care.  
Dr. Marjorie Jeffcoat  
(Department of Periodontics, University of Alabama at Birmingham, USA)
2. Molecular Mechanisms of the in vitro Multistep Oral Carcinogenesis.  
Dr. Byung-Moo Min  
(Department of Oral Biochemistry, College of Dentistry, Seoul National University, Korea)

### シンポジウム

- ・バイオサイエンスを用いたう蝕予防の試み  
オーガナイザー: 武笠 英彦 教授(防衛医科大学校)
- (1) バイオサイエンスを用いたう蝕予防の試みについて  
武笠 英彦(防衛医科大学校)
- (2) バイオサイエンスを用いた口腔内う蝕細菌検査法の開発  
五十嵐 武、後藤 延一(昭和大学歯学部)
- (3) う蝕細菌の病原因子に対する抗体を用いたう蝕受動免疫法の開発  
福島 和雄(日本大学松戸歯学部)

- (4) 動植物を用いたう蝕予防抗体の大量調整法の開発  
花田 信弘(国立感染症研究所口腔科学部)
- (5) 合成ペプチドを用いたう蝕予防ワクチンの開発  
西沢 俊樹(国立感染症研究所口腔科学部)
- ・口腔疾患診断とゲノムサイエンス  
オーガナイザー: 栗原 英見 教授(広島大学歯学部)
- (1) シェーグレン症候群や口腔粘膜疾患における遺伝子診断  
中村 誠司(九州大学歯学部)
- (2) HLAクラスII分子多型から捉える歯周病疾患感受性の免疫遺伝学  
大山 秀樹(岡山大学歯学部)
- (3) 歯周病における自己反応性T細胞の受容体遺伝子解析  
山崎 和久(新潟大学歯学部)
- (4) 頭蓋・顎顔面口腔疾患の遺伝子診断  
岡本 哲治(広島大学歯学部)
- ・顎口腔系における構造と機能の加齢変化  
オーガナイザー: 矢嶋 俊彦 教授(北海道医療大学歯学部)
- (1) 歯の喪失に伴う顎骨の構造変化  
井出 信吉、安部 伸一(東京歯科大学)
- (2) 歯周組織における弾性系線維形成の加齢変化  
矢嶋 俊彦、入江 一元、敦賀 英知(北海道医療大学歯学部)
- (3) Microarray Technologyを用いた、加齢によって変動するマウス顎下腺遺伝子の解析  
平塚 浩一、安孫子 宜光(日本大学松戸歯学部)
- (4) 口腔機能の加齢変化 - 高齢者における口腔運動機能、唾液性状、咽頭微生物叢の観察から -  
寺田 容子、市川 哲雄、弘田 克彦、三宅 洋一郎、細井 和雄(徳島大学歯学部)
- ・頭蓋顎顔面の分子発生機構  
オーガナイザー: 江藤 一洋 教授(東京医科歯科大学大学院歯学系)
- (1) 頭蓋顎顔面の形成異常  
大山 紀美栄(東京医科歯科大学大学院歯学系)
- (2) 頭蓋縫合の分子メカニズム  
井関 祥子(東京医科歯科大学大学院歯学系)
- (3) 頭蓋顎顔面の発生と神経堤細胞  
大隅 典子(東北大学大学院医学研究科)
- (4) 頭蓋顎顔面の進化  
倉谷 滋(岡山大学理学部)
- (5) 頭部形成の分子機構  
相澤 慎一(熊本大学医学部)
- ・21世紀の歯科医療と歯科生体材料・技術  
オーガナイザー: 中村 正明 教授(大阪歯科大学)
- (1) わが国のティッシュエンジニアリング研究の現状とその産業展開  
上田 実(名古屋大学大学院医学研究科)
- (2) 21世紀の歯科医療に期待される歯科成形技術の展望  
宮崎 隆(昭和大学歯学部)
- (3) テクノロジーアセスメントに基づく21世紀型歯科補綴治療の提案  
赤川 安正(広島大学歯学部)
- (4) 高齢者の自立とQOLを支援する歯科医療  
野村 修一(新潟大学歯学部)

## V . 2001 IADR Hatton Awards Competition 候補者決定

今回は15名の応募があった。JADRから本賞への応募者数は例年通り、5名がエントリーでき、全理事による慎重審査の結果以下の先生方（敬称略）が候補者と決定した。

今谷 哲也（東歯大） 岩崎 剣吾（医歯大）  
 福本 敏（長崎大） B. Linsuwanont（医歯大）  
 高山 真一（阪大）

## VI . 79th General Session (2001, 幕張) IADR 情報

Call for Abstracts Instruction Booklet より抜粋しました。  
 詳細はホームページ <http://www.iadr.com/Meetings/2001/Chiba/main.htm> をご覧下さい。

### DEADLINES

5 January 2001

Deadline for receipt of abstract forms and post-cards. Abstracts received after this date will be refused. Be sure to visit the IADR Web site to receive confirmation of receipt of your abstract ([www.dentalresearch.org](http://www.dentalresearch.org) in the meetings section).

12 January 2001

Deadline for receipt of replacement abstracts(with the appropriate fees).  
 Deadline for presenters to withdraw abstracts (in writing via FAX, mail, or E-mail).

23 February 2001

Abstract acceptance program numbers listed on the IADR Web site.

30 March 2001

IADR/AADR membership dues deadline for attending the meeting at member rates.

18 May 2001

Pre-registration deadline.

27 - 30 June 2001

IADR General Session & Exhibition in Chiba, Japan.

### SCHEDULE OF EVENTS ( not fixed )

Scientific sessions will be held at both the Makuhari Center and the connecting Prince Hotel.

The IADR registration will be held at the Makuhari Center in Chiba, Japan.

Tuesday, June 26

2:00 pm - 5:00 pm Registration Open (for pre-registrants only)

Wednesday, June 27

8:00 am - 3:00 pm IADR/Unilever Hatton Awards Competition

8:00 am - 4:30 pm Registration Open

9:00 am - 12 noon SEADE/IFDEA Symposium, "Challenges in Dental Education in the New Millennium"

5:15 pm - 8:00 pm Opening Ceremonies & Welcome Reception

Thursday, June 28

8:00 am - 8:45 am W. J. Gies Distinguished Scientist Speaker-Prof. Tadimitsu Kishimoto

12:15 pm- 1:45 pm Lunch & Learning Session #1

Poster Sessions, Symposia and Oral Sessions

Exhibition Open

Friday, June 29

8:00 am - 8:45 am Plenary Session

Poster Sessions, Symposia and Oral Sessions

Exhibition Open

Saturday, June 30

8:00 am - 8:45 am Plenary Session-Prof. Fumihiko Kajiya

12:30 pm- 1:30 pm Lunch & Learning Session #2

Poster Sessions, Symposia and Oral Sessions

Exhibition Open

5:45 pm

Meeting Adjourns

REGISTRATION FEES	Pre-registered	On-site
Member *	\$250	\$290
Non-member	\$475	\$515
Student Member *	\$ 60	\$ 60
Student Non-member	\$100	\$100

\*Membership dues must be paid in full by March 30, 2001, for you to qualify for the member registration fee. All non-members who submit an abstract will be sent membership information.

このNewsletter発行後に、上記Registration Feesが訂正されました（Member-Pre-registered \$275 On-site \$315, Non-member - Pre-registered \$510 On-site \$550）。下記「入会ご案内記事」も訂正してお詫び申し上げます。

## VII . IADR/JADR への入会をお勧めします！

2001年6月27日から30日まで千葉・幕張で第79回IADR総会が開催されます。ご存知の通り、総会参加費はmember登録をしているかしていないかで、大きく異なります。ちなみに、Non-member registration feeはPre-registeredで\$475ですが、memberであれば（ナント！）\$250で参加することができます。入会に際してIADR/JADR会員2名の推薦が必要になりますが、推薦を得ることが難しい場合は、その旨明記して申込書を提出すれば、JADR理事会で協議のうえ入会および推薦者を検討することが可能になりました。なお、会員資格は2001年3月30日までにJADR/IADR年会費を支払うことが条件ですので、手続きはお早めに進められますようご注意ください。

歯科医学を総合する学術会議が21世紀初めに日本で開催されるという絶好の機会に、お一人でも多くの歯科関係者が会議にご参加されますことを、大いに期待いたします。

（入会申込書請求先；その他問い合わせ先）JADR事務局  
 〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2  
 千里LCビル14F 学会センター関西内  
 URL:<http://www.bcasj.or.jp/jadr/>  
 E-mail:[o-socie@bcasj.or.jp](mailto:o-socie@bcasj.or.jp)  
 Tel:06-6873-2301 Fax:06-6873-2300



## CONTENTS

I . IADR 役員の任期を終えて	1	I . Experience as an Officer in IADR	1
II . KADR 学術大会報告	4	Mamoru Sakuda: Past President of IADR	
III . 第 78 回 IADR 総会 ( Washington, DC ) 特集		II . A report of the KADR general session	4
1. 2001 年につながる Japan Night の盛り上がり	5	Noriko Osumi: Tohoku Univ.	
2. 第 78 回 IADR 大会に参加して	6	III . The 78th IADR meeting in Washington, DC	
3. Dental Material Group について	6	1. Report of the Japan Night	5
4. Plenary lecture: Sequencing the entire genomes of free-living organism: the foundation of medicine in the new millennium	7	Katsuji Okuda: Executive Director of JADR	
5. Hatton Awards Competition に参加して	8	2. Report of the general session	6
6. Craniofacial Biology Group と NIH について	10	Nobuo Nakabayashi: Tokyo Medical and Dental Univ.	
7. Craniofacial Biology Group について	11	3. Dental Material Group	6
8. Prosthodontics Group について	11	Hiroshi Murata: Hiroshima Univ.	
9. Geriatric Oral Research Group について	12	4. Plenary lecture: Sequencing the entire genomes of free-living organism: the foundation of medicine in the new millennium	7
10. 歯周病学研究セッション「病因論 - 歯肉線維芽細胞とコラーゲン」に参加して	12	Yoshimitsu Abiko: Nihon Univ., School of Dentistry of Matsudo	
11. 第 78 回 IADR 大会に参加して ( 歯周病原性菌と免疫に関する発表を中心として )	13	5. Hatton Awards Competition	8
12. 第 78 回 IADR 大会に参加して ( 歯周病原性菌と免疫に関する発表を中心として )	13	Shigetoshi Hiyama: Tokyo Medical and Dental Univ.	
IV . 第 48 回 JADR 総会・学術大会開催のご案内	14	Hideki Ohyama: Okayama Univ.	
V . 2001 IADR Hatton Awards Competition 候補者決定	15	Seicho Makihira: Hiroshima Univ.	
VI . 79th General Session(2001, 幕張) IADR 情報	15	Tomoko Hashikawa: Osaka Univ.	
VII . IADR/JADR へ入会のすすめ	15	Hideo Yonezawa: Tokyo Dental College	
		6. Craniofacial Biology Group and NIH	10
		Satoshi Fukumoto: Nagasaki Univ.	
		7. Craniofacial Biology Group	11
		Shigetoshi Hiyama: Tokyo Medical and Dental Univ.	
		8. Prosthodontics Group	11
		Masahiko Kikuchi: Tohoku Univ.	
		9. Geriatric Oral Research Group	12
		Kazunori Ikebe: Osaka Univ.	
		10. Periodontal Research Group	12
		Satoru Yamada: Osaka Univ.	
		11. Report of the general session	13
		Tetsuo Kato: Tokyo Dental College	
		12. Report of the general session	13
		Ryuta Kimizuka: Tokyo Dental College	
		IV . Announcement of the 48th Academic Meeting of JADR	14
		Dr. Yoshimitsu Abiko: The Chairman of the 48th Academic Meeting of JADR	
		V . 2001 IADR Hatton Awards Candidates from JADR	15
		VI . Announcement of the 79th General Session(2001, Makuhari)	15
		VII . Let's join IADR & JADR	15

## 編集後記

本年度の2号は、IADR 元会長作田 守先生に「IADR 役員の任期を終えて」の執筆をいただきました。学術大会のあり方など、私共にとって大変参考になります。また、予算や学術雑誌に関する詳細な情報からも多くのことが学べます。さらに IADR の使命までが紹介されており、教授職にある会員は熟読すべき内容と感じています。大隅典子先生の「KADR 学術大会報告」は、Australia and New Zealand, Chinese, Southeast Asian などの Division との連携の必要性が強調されていることと軌を一にするものであろうと思います。第 78 回 IADR 総会特集は内容豊富で、今後の IADR・JADR への期待なども含めた原稿を投稿していただき、まとまりのあるものとなったと思います。中林宣男先生の報告などに関しては、2001 年幕張大会を直前にして LOC や JADR は真摯に受止め、その成功に向けて努力しなければならないと感じます。Hatton Awards Competition に参加したレポートには、JADR から選抜された将来性のある有能な研究者であることを裏付ける内容が溢れているといえます。作田先生をはじめ、ご投稿いただいた先生方に感謝いたします。(事務局 長 奥田克爾)

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

連絡先: 〒 560-0082 豊中市新千里東町 1-4-2 千里 LCC 14 階 学会センター関西内 FAX 06-6873-2300 担当: 大戸 JADR 事務局 長 奥田 克爾 (東京歯科大学微生物学講座) 連絡先: 〒 261-8502 千葉市美浜区真砂 1-2-2 FAX 043-270-3744 2000 年 8 月 20 日 発行